

第3回兵庫県立大学評価委員会 議事録

- 1 日時 平成19年3月14日(水) 15:30~17:40
- 2 場所 兵庫県公館第2会議室
- 3 出席者 (委員)
大南委員長、西門委員、西川委員、平松委員、米田委員
(県立大学)
熊谷学長、天野副学長、南副学長、阪本副学長、
井筒事務局長、福井事務局副局長兼総務部長、
大塚事務局企画調整部長、竹島事務局学務部長
(県)
辻井企画管理部長、大原企画管理部教育・情報局長、
杉原企画管理部教育・情報局大学課長

4 議題等

(1) 開会

(2) 挨拶(辻井部長)

- ・ 本日の委員会では、前回委員会の小項目評価結果を踏まえ、中期計画の6つの大項目評価及び全体評価をしていただく。
- ・ その後、評価結果を委員長から知事へ報告していただき、知事から県立大学に通知し、現在大学において策定中の第2期中期計画の策定に反映いただくとともに、大学における業務運営の改善・充実にも生かしていただきたい。

(3) 議事

① 委員長報告

大南委員長より最初に資料3、資料4にて、小項目評価結果の確認と大項目評価の基準、大項目評価及び全体評価の概括を報告。

② 大項目評価(案)、全体評価(案)、報告書(案)について

事務局(杉原課長)より資料5、資料6、資料7にて、大項目評価(案)、全体評価(案)、評価報告書(案)について説明。

5 主なコメント等

委員長司会のもとに協議。

(委員長コメント)

- 「今後への期待」のなかで、「必要な資源と学生を含む人材の確保」とあるが、資源の確保とは既存資源の有効活用や改良、また公的資金だけでなく外部資金の獲得など自助努力も含み、また、学生を含む人材の確保とは意欲ある優秀な教員をいかに確保するかということであり、流動性も含むものである。また学生の確保には、意欲ある学生の望ましい志願者数・入学者数の確保も含む。また記載はしていないが、留年者の多い学部も今後の検討課題になってくるが、卒業基準を厳しくした上で留年率を低下させる努力が必要である。
- 研究者データベースについては、公立大学の公共性から厳しい評価としたが、百パーセントを達成している大学は多くないなかで、県立大学が先進モデルを築くことを期待しての評価である。
- 生涯学習についてコメントをのべさせてもらったが、社会貢献の水準が求められており、他の国公立大学も力を入れている。公立の場合は、特に県の施策との関係で見えにくいところもあることは理解するが、第2期中期計画における取組みに期待をしたい。
- 職員のスキルアップについては、各大学も努力している。県の業務で様々な分野の経験を有する職員が大学に集まっているという公立大学の特性を踏まえて、教職協働を含めてそのスキルアップに努められたい。
- 教員評価については、教授会と大学執行部が意見交換し、合意できるような自己申告制度を作ってもらいたい。教育・研究・社会貢献・学内業務ごとのウェイトの中で、教育については下限を設けた上で、各教員にウェイトの判断の申告に委ねるという方法も考えられる。大事なことは、それぞれの専門分野について外部評価を受け、最終的には公表することである。評価委員会としては、そのプロセスと到達度を評価させていただくことになる。

(各委員コメント)

- 国際交流や地域貢献では公立大学には大きな期待が寄せられている。特に国際交流については、神戸市という国際都市を県庁所在地に持つ県として、国際性に期待されている。地域に愛される大学としても、まだまだできることがあると思う。
- 教育・研究については成果をあげているが、運営面にはこれからの課題もある。中

長期的に魅力のある大学とするには、ブランド力、職員の専門性向上、広報などの課題を誰が行うかを含めて第2期中期計画で検討・整備してほしい。単なる統合大学ではなく、特色ある個性を発揮してほしい。

- アイデンティティを明確にして、研究面においても教育面においても素晴らしい大学であることを、強く打ち出してほしい。
- 旧姫工大は統合後、受験者の志望動向が変わってきていると聞く。客観的にその辺りを追跡してほしい。

(大学側コメント)

- 納得できる評価をいただき、評価結果に対する違和感はない。各委員からいただいたコメントもありがたいご指摘である。研究者データベースについては教員の意識改革を進める必要があるし、地域貢献・国際貢献についても積極的に行っていきたい。特に神戸という国際都市を生かすことは大切である。更に、「大学として」だけでなく、「県として」「社会をあげて」留学生に対する受入れ支援を行うことも必要である。
- 教員の任期制については、プラス面もマイナス面もあり難しい問題である。米国では社会全体が流動性のある仕組みとなっており、結果として大学もそうになっているが、日本の風土は必ずしもそうはなっていないのではないか。長期を要する重要な基礎研究もできなくなるということであれば問題である。
→ 任期制については日本の社会も変わりつつあり、将来大学においてもフルタイムの教員とその他の教員は半々ぐらいになっていくのではないか。大学の研究者のマーケットは教授会中心の一方的なものだが、社会に開かれた双方向のマーケットに変わってくるだろう。任期制にもデメリットがあるので、それを克服しながら、その積極的なメリットをどう生かしていくかが重要である。
- これまで3つの大学を如何に1つにするか、ということに気がは入りすぎていて、伝統ある大学が集まっていることに思いが至っていなかった、と感じている。同窓会にしても旧大学の伝統をどう引き継ぐかという認識も大事である。
- 広報に関しては、私学では専門家を入れて戦略的な広報をしている大学もあるが、県立大学には広報戦略を作る母体がなく、このあたりが課題である。
- 学生部長として、旧3大学の伝統を生かしつつ、新しい県立大学としての学生自治会の統合を進めたい。同時に学生を支える後援会、同窓会についての統合も重要である。また、就職支援については、これまでも低学年層へのキャリア開発に取り組

んできたが、就職支援センターなど組織的な対応も大事である。

- 社会貢献については、「A」と評価していただいたが、産学連携はできているものの、生涯学習、国際交流については、不十分な面もあると認識している。特に生涯学習については、様々な地域で行ってはいるものの、新大学としての新しい取組は十分になされていない。今後とも、国際交流も含めて内容充実のために努力したい。
- 来年度、県立大学は完成年度を迎える。第2期中期計画で大学に魂を入れるつもりなので、これからも委員の先生に助言をお願いしたい。
- 大学は優れた人材が柱である。そのためには、最高水準の研究を行い、よい教員をリクルートし、その成果で学生が集まり、また寄付をはじめ潤沢な資金も集まるような良い循環を作ることが重要である。

(最後に)

- 次回の自己評価を提出いただく際に、次の2点に工夫をいただきたい。1点目は、公立大学の質という点から、望ましい目標・目的に対する達成度の定量評価と定性評価の組合せ、プロセス評価とアウトカム評価の組合せ、2点目は、各キャンパスの伝統の継承・発展と改革という点から、学部評価と全学評価の組合せ・関わり、に工夫いただきたい。